

さくらタイムス 令和6年7月号

毎年新緑や花々が美しい時期になると思い出すのが、30年前のワシントンの街並みです。首都で政治の町であることから、ニューヨークなどとは違う

「きちんと襟を正す」雰囲気がありました。と同時にスミソニアン博物館群やケネディセンター（オペラハウス・コンサートホール・劇場の複合施設で総席数は五千あまり）等がある文化・芸術の街でもありました。どこもきれいな緑の植え込みや花壇があり、住民一人当たりの樹木の数は全米都市部で一位でした。このきちんとして美しいところはどこか芦屋に通じるところもあり、いつも歩き回っては楽しんでいました。

縁あって務めた通訳で、膨大な量の緑や花々の手入れの多くを連邦政府から請け負っていたのが「全米園芸療法 (hortitherapy) 協会」と知りました。この療法は花々の手入れをすることで、心身に心地よい刺激と癒しをもたらすとされ、協会ではダウン症などの方々にもまず療法として園芸を楽しんでもらい、さらに職業訓練に進み、ロゴの入った制服と帽子をつけて、市内の花壇や植え込みの手入れをする仕事までできるよう育成していました。政府から請けた事業は相当の収益を上げており、障害者であっても健常者に匹敵する収入を得させ、家を購入するときの手続きの代行や保証、結婚・出産・子育てなど個人的なことも全面的にサポートしていました。協会の建物は「掘っ立て小屋」のような古い木造で、とても「全米～」には見えませんでした。代表の方は

「社会的弱者を自立させ人生全般に渡って徹底的にサポートするのが目的で、それ以外に予算は使わない」と力強く語っておられました。

ここでの学びは、さくらでも生かされており、園芸作業は高齢者でも短時間でできるような仕組みをつくり、年間を通してきれいな花々を地域の方々に楽しんでいただけるようになっていきます。また、コロナ禍が始まった時に、

「誰を守るべき基準とするか」を考え、「さくらでは一番弱い妊婦さんとその胎児さん達を守れるようにする」と周知させていただき、玄関の消毒徹底や感染者が1名出た時に園で全員に実施したPCR検査等、他施設では実行しにくかったことにも理解と協力を得ることができました。その結果4年半の間で園内感染は最小限の1回となっています。

まだまだ何があるか分からない時代に、次世代を担う子ども達のため、誰にでも自然にうなずいていただけるような「目的・基準」を今後も明確にし続けてゆきたいと考えています。

皆様のお考えもお聞かせいただければありがたいです。

どうぞよろしくお願い致します。

園長 山内 香幸